

# 東日本大震災

平成23年3月11日(金)午後2時46分。  
国内観測史上最大のマグニチュード9.0の  
巨大地震が発生し、  
北海道から関東までの広い範囲で  
強い揺れを観測しました。  
この地震により、東北地方から関東地方の太平洋沿岸部に  
想定外の大津波が押し寄せ、  
壊滅的な被害をもたらしました。  
さらに原子力発電所の事故による被害も甚大で、  
現在も多くの方が不自由な生活を余儀なくされています。

震災による死者・行方不明者は約2万人  
建築物の全壊・半壊は約32万戸。  
この地震による被害額は、  
約16兆9千億円とも言われています。



# 記憶を 遺す記録

東日本大震災  
赤十字活動の軌跡



## 義援金 東日本大震災における義援金の流れ



## 活動資金 赤十字活動資金の流れ



## 活動資金へのご協力のお願い

東日本大震災における救護活動(救護班の派遣や救援物資の配付等)をはじめ、救急法の講習など「命と健康を守る」赤十字活動を支えているのは、皆さまからお寄せいただく社資(赤十字活動資金)です。引き続き、ご協力をお願いいたします。

## 日本赤十字社静岡県支部にご寄付をいただいた場合に税制上の優遇措置が受けられます

- 郵便局・ゆうちょ銀行からのお振込によるご協力: 口座番号:00820-3-111391 加入者名:日本赤十字社静岡県支部 ※窓口からの振込は手数料が免除されます。
- 銀行からのお振込によるご協力: 専用の振込用紙がございますので、お問い合わせください。
- 口座引落によるご協力: 指定の預金口座から自動引落で寄付することができます。 ※専用の申込用紙に必要事項を記載していただく必要があります。
- 遺贈や相続財産によるご協力: 遺贈による寄付や相続財産の寄付も承っております。
- ご持参によるご協力: 日本赤十字社静岡県支部や各市町村の赤十字担当窓口へ直接ご持参ください。

※詳細については、組織振興課 社員係までお問い合わせください。

静岡県支部では、地震の発生直日から

医療救護活動を行うための救護班(※)を編成し、被災地へ派遣しました。被災地では、延べ2,100名以上の方の診察を行いました。東日本大震災の被災地は広範囲に及んでいますが、静岡県支部の救護班が活動したのは、岩手県釜石市及び大槌町と宮城県石巻市です。

釜石市では、津波被害を免れた場所に臨時の救護所を開設し、24時間体制で診療を行いました。釜石市に隣接する大槌町は、津波後に発生した火災の影響で、一面焼け野原となっていました。地震発生から2日後の3月13日、静岡県支部の救護班が医療チームとしては初めて、大槌町に入りました。

津波を逃れ、公民館などに避難していた方のために巡回診療を行ってきました。

石巻市では、避難所や集落の巡回診療が主な活動でしたが、活動は徐々に変化していきました。医療ニーズの変化に伴い、被災者の精神面を支援するこころのケア活動も実施してきました。このような私たちの迅速かつ継続的な活動は、皆さまから毎年お寄せいただく活動資金に支えられています。

※救護班：医師や看護師など編成された医療チーム



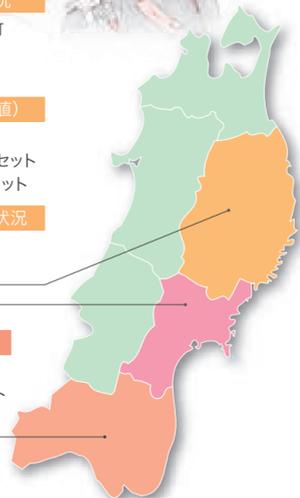
## 静岡県支部の救護活動

救護班の派遣状況
場所:石巻市 派遣数:10班 82人 診察人数:851人
救援物資(全国数値)
毛布:88,490枚 緊急セット:16,236セット 安眠セット:6,000セット
こころのケア
場所:石巻市 派遣数:3班 11人

救護班の派遣状況
場所:釜石市、大槌町 派遣数:8班 89人 診察人数:1,267人
救援物資(全国数値)
毛布:1,000枚 緊急セット:11,682セット 安眠セット:5,000セット
介護チームの派遣状況
場所:陸前高田市 派遣人数:2人

ボランティア活動
延べ10,277人が 避難所の巡回や 義援金の募金活動などを 行いました。

救援物資(全国数値)
毛布:16,020枚 緊急セット:12,340セット 安眠セット:2,500セット



安眠セット  
マット、耳栓、アイマスクなど、睡眠を支援する6品目が入っています。



緊急セット  
携帯ラジオや歯ブラシ、タオルなど、避難所で必要な日用品が23品目入っています。

普段は救急科に従事し、対応力・判断力が求められる医療現場に毎日直面する日々。救護班としての活動は5年程になります。しかし、これまで特に大事での出勤はありませんでした。今回までは…

3月11日、起こりうる事態が現実には。当日の午後には出勤が決まったものの、東名高速が通行止め。なかなか出発できず、未完成の新東名を利用し、清水を出発したが、もう日付けが変わろうとしている夜中12時近くのことでした。どこに向かうのか具体的な場所も不明確なまま、まずは岩手県盛岡市を目指すことに。すでに地震発生から9時間近くになりますが、細かい被害状況や医療ニーズはつかめなままの出発でした。

12日午後、ようやく盛岡赤十字病院に到着。盛岡市内は停電で信号が消えているものの、大きな被害などは見受けられません。ここに医療ニーズはなく、そして、情報もありませんでした。どこで我々を必要としているのか。できる限り最前線に行きたい。

静岡を出て1日以上が経過し、医療に携わる者として「早く現場に」という高揚した気持ちに反して、救護にあたることができないうもどかしさが募っていきました。岩手県の住田町、遠野市と情報を求めながら移動し、釜石市災害対策本部に到着した時はすでに地震から丸2日経っていました。最前線で活動したい。しかし、

## 記憶を

## 遺す記録

## 東日本大震災 赤十字活動の軌跡

## 深く根付いた赤十字の心。 看護師の仕事に誇りを感じました。

浜松赤十字病院 看護師長 浅岡みち子

救護班から離れて10年ほどになるが、役割を果たすことができるのか。

救護班所属の看護師が家庭の事情などですぐに出勤できず、招集された看護師長たち。山形県出身の私としては、地元東北を放つてはおけない。幸い、子供達も独立し、主人と二人生活の身で自由もきく。私も何か役に立つことができるとは。どこに手を挙げました。最新の救護訓練を受けていないので、若干不安ではありましたが…。とにかく使命感のようなものを感じたのです。

盛岡市に着くまでの道のり。すぐに自宅に戻り、できるだけだけの食料と防寒着、カイロなどを持ち、出勤準備を整えました。ラジオの緊急地震速報だけが情報源で東北道を北上。緊急車両のみの通行が許された道を行くのは、自衛隊警察、救急車両、赤十字マークの車だけでした。途中、自衛隊の方々に「よろしくお願いします」と声をかけられ緊張感と責任が重くのしかかります。

医療を待つ人たちのもとへ。盛岡市から住田町、遠野市そして釜石市へ。鈴子広場でdERUを立ち上げ、診療を開始するまで、浜松市を出発してから40時間もの時間が経っていました。診療開始からまもなく、40代と思われる男女二人が大槌町から4時間かけて歩いて助けを求めにきました。大槌町の町役場が流され、町長も流され

ここは冷静な判断が求められたのです。釜石市の高台に位置する鈴子広場から少し先は、ごっそりと津波に飲み込まれ、目を覆いたくなるほどの、まるで地獄絵図のような光景が広がっていました。我々救護班まで危険が及んではならない。それは確実に救護活動を続けるためなのです。班長として、鈴子広場にdERU(仮設救護所)の設置を決定しました。

医師としての真価が問われた瞬間。被害の状況は、津波での水死・溺死か行方不明、もしくは生存・軽症。揺れの被害よりも津波による生死がはつきりと分かれていたのです。

ただ、さえ高齢者が多いこの地域には、高血圧、糖尿病、風邪薬などの日常の薬を必要とする患者さんがほとんど。地元の薬局も、自宅にあった薬も流されてしまっていたのです。しかし、救護班の薬の手持ちは少なく、この状況は予想できませんでした。薬がない中、どう対応すべきか、そしてベストを尽くすには…。全てが現場判断でした。医師としてどうあるべきか、普段の医療活動の真価もまた問われていました。

### 緊急災害時こそ心のケア

専門でない小児患者。10歳の男の子が「お腹が痛い」と父親と祖母に連れられてやってきました。苦しそうな表情で父親に支えられ、診察してもこれといった病状が見極め



壊滅的な被害なんです」と。しかし、現地の情報は皆無です。居ても立つてもらえませんでしたが、急遽ミーティングを行い、浜松班が大槌町の情報収集に向かうことに。安全が確保されていない中、自衛隊に先導され、凍結した山道を進むと、山のおちこちでは火事が起こり、それを避けながら、一方は断崖絶壁。生きた心地もしませんでした。

しかし、大槌町で医療を待つ人たちがいる。早く向かわなくては。ただ、そんな想いでした。救護の心得として分かっていたながら…。家族を探し、寒い中を彷徨う人。ガソリンスタンドの上に乗上げたバス。家は骨組みだけ。悲惨な光景に涙が滲み、言葉も失っていました。途中、疲労困憊している人を車に乗せてあげることも出来ず、毛布を貸してあげることもできない現実。全ての人にあげられないことを一部の人だけに提供するわけにはいきません。救護の心得として分かっていたが、これが正しいことなのか…。シレンマを感じました。

### 看護師としての原点に立ち戻った現場。

大槌町の避難所に着くと、わっと人々が集まってきました。薬を求めていたのです。高血圧や糖尿病などの慢性疾患や不眠など、薬の不足は切実でした。短い時間の中、困っている人から優先的に、忍耐強い東北の人たちですが「精神的なダメージを受けている状況では、短時間でも

られません。聞くと、「お母さんと弟が見つからないから、探さなくちゃ」と、涙ながらに言います。突然の出来事に、極度のストレスがこの子にかかったのだらうと。腹痛を抑える薬を処方することしか出来ない辛さ。ぐっとう唇をかみ締めました。

### 「災害は来るんだ」

考え方が変わりました。連絡すらも取れなくなる現場の状況。その中、自分たちも被災者でありながら、患者の対応を懸命にしている地元の医師たち。市や行政、地元消防

## 最前線での判断と情報の大切さ。 この経験を次につなげたい。

日本赤十字社静岡県支部 事業推進課 救護係長 橋本茂昭

過去、阪神・淡路大震災、能登半島地震での災害救護を経験してきましたが、これまでは比べものにならないほど広範囲にわたる被害を目の当たりにして、津波の恐ろしさを痛感しました。

### 情報もない、暗中模索の状況下で。

地震発生直後から、多方面からの情報収集をしつつ、その日の17時過ぎには救護班コーディネーター(連絡調整員)として、被災地への出勤が決まりました。ただ、いったいどこに向えばいいのか。情報もないまま、新東名を通過し、東北道を北へ向かったのです。

真つ暗な東北道は、あちこちで路面が陥没し、低速走行するしかありません。12時間以上かけてようやく到着した盛岡赤十字病院。しかし、ここも情報はありませんでした。

救護を必要としている場所はどこなのか。行き先がわからない、まんじりともしない1日を過ごさざるを得ず、医師も、もちろん私もイライラ

## 微力でも力になりたい。 私にもできることがあります。

健康生活支援講習指導員 杉山澄子

元赤十字職員として私にできること。退職後、健康生活支援の講習などを指導していましたが、まさかこんなにも早くボランティアとして救護現場に行くことになると思ってもいませんでした。

### 私にも何かできることがあるのではないかと。

支部からボランティア募集のメールが届き、駆り立てられるようにすぐに「行こう」と決めました。4月21日〜29日まで(実働7日間)活動するために、岩手県の陸前高田市に向かったのです。宿泊先の遠野市から陸前高田市までは毎日、車で行きました。1日に訪問できる避難所、介護施設は1〜2ヶ所。そこで、ホット



救護班がいるだけで安心感があつたようです。ましてや、私が東北弁でコミュニケーションをとることができたのは、皆さんに安堵感を与えられたようで、私が救護に行った意味を持たせてくれたように感じました。

今回第1班として、医療救護が未介入だった大槌町に、巡回診療の道筋を作ることができたのはとても大きな成果でした。それでも充分な医療の提供ができなかったこと

の人たち。協力しあう東北の人々の強い姿に感銘を受けました。

日赤の医師として、先人たちの歴史と信頼が窺いた赤十字を背負う大切な責務。初動はマニュアルがあっても、現場は想定外のことばかり。その場での判断が重要になりました。

医師としての思いも新たにできる機会となった今回の震災。今回の経験は決して無駄にはなりません。今後の活動に活かし、赤十字の信頼をこれからもつないでいきたいと思えます。



### 橋本茂昭

イラが募るばかりでした。ただ、自分の役割は安全面を確認しながら、医療ニーズの情報を集めること。とにかく現場判断が重要となりました。釜石市の鈴子広場にdERUを立てると決定。ここが果たして最前線なのか。迷いはありましたが、中田医師の判断にも助けられ、振り返ってみれば、この場所間違いなかったと思っています。

### 改めて「身近なもの」となった災害。

情報がいかに大切かを再認識しました。情報の無い現場では、経験に基づく想像力によるコミュニケーションが大切です。指示がない時に何通りもの方法を考え、判断し、活動すること。赤十字の組織力、協力体制で成り得るものだという実感もありました。今回の教訓を生かすこと。この責任ある職務に改めて誇りと責任を感じずにはいられません。



タオルや足浴、肩揉みなどのリラクゼーション指導を行いました。今回の健康生活支援の活動は、日本赤十字社としても初めての実施です。まずは、私たちが何のために来たのかを、各避難所の責任者に説明し、被災者の方々に理解していただくことから始めました。

震災から1ヶ月強が経過した被災地。若い方々や男性は、復興作業に出かけ、避難所には高齢者の方々がばかり。辛く寒い避難所生活の中でも、皆さんが明るくされていたのがとても印象的でした。23日「ひかみの園を訪れて。

元々ご近所同士の4名の高齢者の方々に出会いました。長く不便な生活の中でも、前向きに明るく過ごされていたのですが、疲れも蓄積されている時期です。首にホットタオルをあてると、皆さんがぼっと明い笑顔になり、「ああ気持ちいい」と深くため息をつき、ほっとしたお顔をされたことが忘れられません。「ああ、来てよかった」と思えた瞬間です。

仮設住宅に移られてもこれから本格的に復興するまで、まだまだご苦労の連続だろうと思います。少しでもリラクゼーションの指導がお役に立てば。そして、今後起こり得る災害のためにも、この健康生活支援の活動が広く認知され、支援者が増えることを願って止みません。

への悔しさが残ります。看護師として改めて思うこと。より身近に患者さんに接したいと思うようになりました。赤十字の誇りと使命感。これからも忘れることなく、大切にしていきたいと思います。

